

しょうがくせいに
孕まされたい



"PREGNANCY DIARY OF A LEWD
LASCIVIOUS GIRL"



「んっ、はあはあ…くっ、はあはあ…」

麻友は体を小刻みに痙攣さすと、恍惚に満ちた表情で息を荒げている。

今しがたまで自分の秘部に入れていた指を抜き、滴るまでに濡れたそれを見て、指を口の中に入れる。

(においはないけど、ちょっとしょっぱい味)

「んっ……ふう、あっ……」

私は口の中に入れた左手の人差し指と中指を舌で愛撫する。

そんなことを考えていると、また下半身が疼いてくる。

私には秘密にしていることがある…そう!!

暇さえあればオナニーをするほどオナニーが大好きなのだ!!

最初は自分の愛液がたっぷりついた指を軽く舐めるだけだったのだが、次第に激しさを増していく。

その行為に夢中になっている時だった……。

コンコンッ!!!! 誰かがドアをノックした。

「えっ!？」

突然のことで驚いてしまった。

こんなところを見られるわけにはいかない。

でも鍵をかけていない以上、このまま黙っているわけにもいかなかったので、声を押し殺しながら返事をした。

「はい？」

すると扉の向こうから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あっ、お姉ちゃん、入っていいかな? っつか入るよ」

「えっ!?! ちょっ!!!」

私が言い終わる前に、部屋の中に入ってきた。

そこには隣の男の子のがいた。

私は、某有名私立の大学生ということで、ここ半年間この男の子の家庭教師を頼まれてしている。

もともとは家庭教師派遣の会社でのアルバイトだったのだが、理由があってクビになってしまった。

だから今はフリーランスとでもいうのだろうか…どこにも所属せずに一人でやっている。

「あれっ? 翔太君今日は勉強する日だっけ？」

私は何とか取り繕おうとしながら返すが、説得力は微塵もない。なぜなら、下着を脱ぎ散らかしており、全裸にタオルケットで身を包んだだけの格好だからだ。

「うわぁっ、お姉ちゃんごめんなさい!!」

彼もどうしていいか分からないようで、顔を背けながら謝ることしかできなかった。

「お母さんが、いつもお世話になっているからこれ持っていきなさいって…」

「そ、そうなんだ。ありがとうって言うておいてね。」

「う、うん。それじゃあ……」

「あっ、待って!!」

私が呼び止めると、彼はビクッと体を震わせた。

「えっと……その……お願いがあるんだけどいいかな？」

(ああ、ダメだ…私の悪い癖が出ちゃう…)

私は恥を忍んで彼に頼み込んだ。

「……何？」

「実は、その……私、さっきまでオナニーしてて……」

「お、おな？」

「あ、えっと……そのお……一人エッチしてたの!!」

私が顔を真っ赤にして叫ぶように言うと、彼はキョトンとしていた。

「それでね、まだ物足りないから手伝ってほしいんだけど……」

「て、手伝うって何を!？」

「えっ、えっと……それはね……」

私は顔を真っ赤にしながらか彼に伝えた。

実は麻友が家庭教師をクビになってしまう原因はこれなのだ。

麻友は年下の男の子といると自制がきかなくなってしまう。

以前はここまで露骨ではなかったが、裁判沙汰になりかけてしまい、その時は運よく事なきを得た。

「わ、私のここに指を入れてほしいの!!」

そう言いながら、自分の秘部を指で広げた。

(ううっ、は、恥ずかしいよお)

私が羞恥心で体を震わせていると、彼は恐る恐るといった感じで近づいてきた。

「えっと、こうでいいの？」

そう言って、私の秘部に人差し指を入れた。

「あんっ♡」

思わず声が出てしまった。

(あっ、入ってきたぁ♡)

私は快感のあまり、体を震わせた。

しかし、彼の指の動きはぎこちないものだった。

(あれっ?もしかして初めてなのかな?)

私は不思議に思ったが、そんなことはどうでもよかった。今はただ気持ちよくなりたいだけだ。

「んっ、もっと激しく動かしても大丈夫だよ」

私がそう言うと、彼はゆっくりと動かし始めた。

(あはっ♡これ気持ちいいかもお♡)

「あんっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」

私は声を抑えられなくなっていた。

彼は、私の反応を見ながら指の動きを速めていく。

(ああ、すごい♡)

私は無意識のうちに腰を動かしていた。

「お姉ちゃん……なんか濡れてるんだけど……」

彼が戸惑いながら言ってきた。

(えっ?何これ!?私、感じちゃってる)

「そ、それはね……女の子は気持ちよくなると、ここが濡れるの」

「へえーそうなんだぁ。知らなかったよ」

彼は興味津々といった様子で聞いてきた。

(んっ、なんかこれ気持ちいいかもお♡)

私は無意識のうちに腰を動かしていた。

すると、彼が指を引き抜いた。

「んっ、どうしたの?」

「えっと……僕も気持ちよくなりたいんだけど……」

「えっ!?そ、それってもしかして……」

私は彼の本能が何をしたいのか理解した。しかし、この時の彼にまだそれが何たるかは理解できておらず、気持ちよさそうな麻友をみて、自分もこんな風にされてみたいと思ったに過ぎない。

(ああ、私ってなんてエッチなんだろう……)

彼の体は正直だった。

彼の股間を見ると、ズボンの上からでも分かるくらい膨らんでいた。

「お姉ちゃん、どうすればいいの?」

「えっとね……ズボンを脱いでくれるかな？」

私がそう言うと、彼は素直に従ってくれた。

(うわぁっ、すごい♡)

彼のモノを見た瞬間、私は思わず息を吞んでしまった。

(これがまだ剥けていない男の子のおちんちなんだぁ♡)

私は初めて見る幼い形をしながらも、私が知っている中で最も大きいそれに興味津々だった。

「えっと、それでどうすればいいの？」

「あっ、ごめん。えっとね……まず最初に手で握って上下に動かしてみて」

私がそう言うと、彼は恐る恐るといった感じで握った。

(あぁ、かわいい♡)

「んっ、なんか変な感じ」

「ふふっ、大丈夫よ。そのまま続けてみて」

私がそう言うと、彼はゆっくりと動かし始めた。

(あぁ♡)

「んっ、やっぱり、これなんか変だよ。」

「ふふっ、それが気持ちいいってことよ」

「今度は私が動かしてあげる♡」

ビクンッ!!一瞬彼の体が震えるが徐々に息が荒くなってきている…。

(あぁ♡かわいい♡)

私は彼の姿に興奮していた。

(もっと気持ちよくしてあげたいなぁ♡)

私は、まだ子供の形をしているペニスの真ん中をしっかりと握り、先っぽから下に向けてゆっくりと覆いかぶさっているものを引っ張ると…とうるんと剥け亀の形をしたものが飛び出した。

彼の亀頭は真っ赤に充血し、興奮していることを示すかのように熱を放っている…ペニスの先からはカウパーらしきものがにじみ出ている。

「お姉ちゃん…スースーするよ…」

大丈夫、これが男の人たちにとっては普通のことなのよ」

私は、彼に優しく語りかける。

「そうなの？」

(ふふっ、かわいい♡)

「ええ、そうよ。だから安心して」

オナニーという言葉も知らないくらいだ…きっと剥いたことなんてないのだろう。
彼のペニスの周りには少しばかりの恥垢がついており、独特のにおいを放っていた。

(ああ、この匂いたまらない)

私は、彼の亀頭に顔を近づけると、舌で優しく舐めてあげた。

(んっ、ちょっとしょっぱいけど美味しい♡)

「んっ、お姉ちゃん……くすぐったいよ」

彼が身を振りながら悶えている。

(ふふっ、かわいい♡)

私が舐める度にビクビクと反応してくれるのが嬉しくてつい夢中になってしまう。

麻友は舌先で大人になったばかりの敏感な亀頭部を舐めまわしながら口でしごき始めた。

ジュボツジュボツと卑猥な音が響く。

麻友は空いている左手で自分のヴァギナを激しく擦るように触り、時折中指と薬指を奥に挿入し上下運動をさせる。そして、陰核への刺激も忘れない。

(ああ、私、こんな年下の男の子のちん○しゃぶりながらオナニーしてる…)

麻友の興奮も徐々にクライマックスへ近づいてきたころ、

「んっ、お姉ちゃん……なんかおしっこが出そう……」

私は彼が初めての射精を迎えるのだと瞬時に悟った。

彼がそう言うのと、私は口を使って上下運動をはやめた。

(飲みたい！！初めての精子飲みたい♡)

そんな変態的な言葉で脳内は埋め尽くされていた。今考えると、もうこの時に既に私の性癖は歪んでいたのだ…

そして、自分のヴァギナを弄っている指をすかさず膣奥へ入れると上下運動のスピードを上げる。

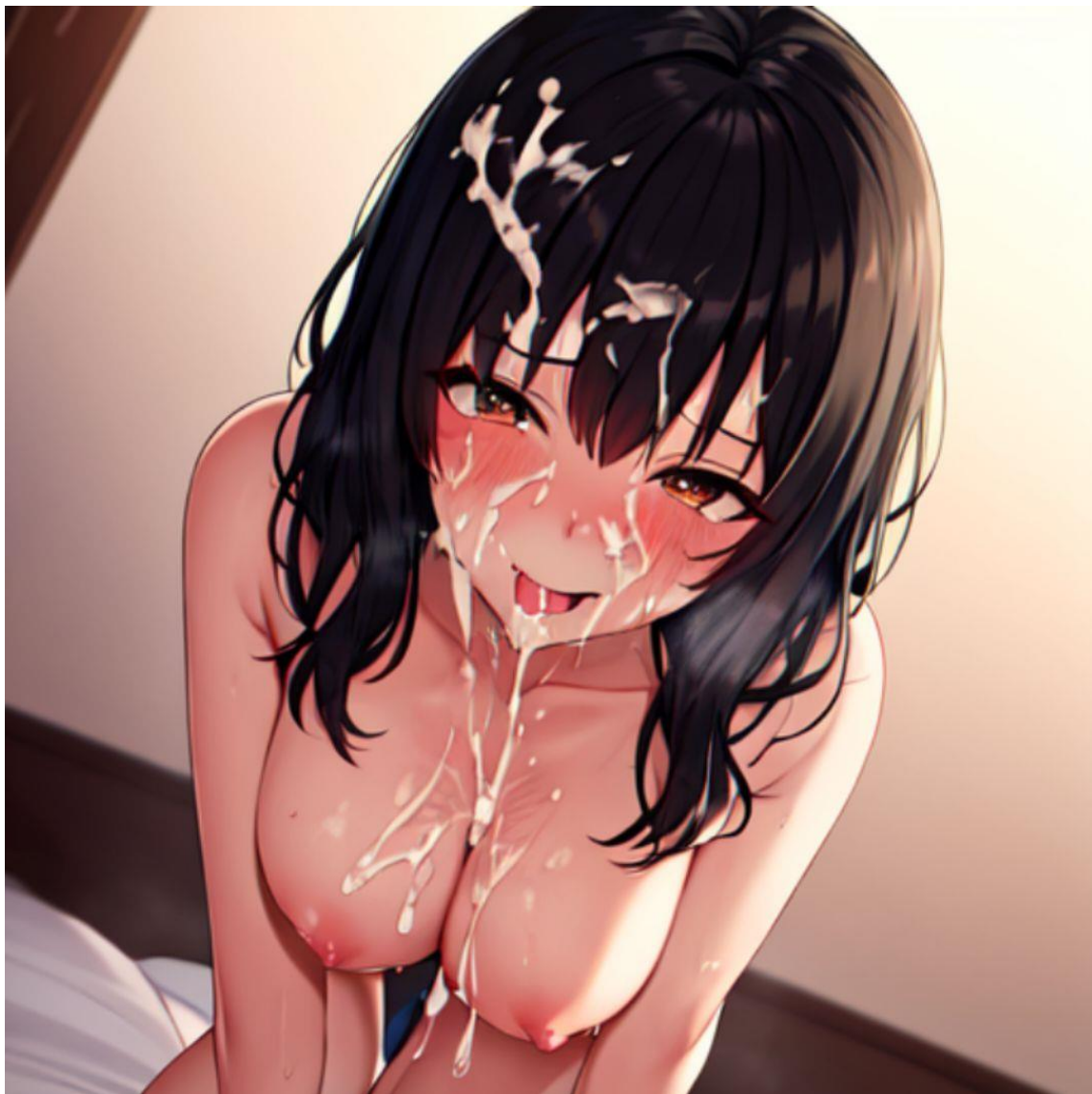
ぶじゅぶじゅぶじゅ…という下品な音とちん○を啜えた口からかすかに漏れ出る自分の嬌声、そして下腹部から聞こえる、ぐちゅぐちゅぐちゅという音がまるで三重奏のように聞こえ、麻友は絶頂を迎える。

(イクッ、イクッ、イクッ、いつちやうううううう)

ビクンビクンと体を痙攣させると、同じタイミングで

ショワァァァ!!口の中でも音が聞こえるくらいペニスが膨張し、ドクンドクンと脈打つ動きに合わせてどんどん麻友の口の中へ翔太の精子が送り込まれる。

ゴクッゴクッと麻友はのどを鳴らして飲み込むが、勢いがすごすぎて間に合わない。体感ではコップ1杯分くらいは飲んでいる感じだ。



たまたま、口からペニスを話すと……彼のペニスからはまだ勢いよく白い液体が飛び出ししてきた。

(うわっ!!)

それは私の顔に思いっきりかかり、髪の毛や顔にべったりと張り付いた。

(うわぁ、すごい量♡)

私は自分の顔についた精液を指ですくって舐めてみた。

(んっ、苦いけど癖になりそう♡)